

# 「日本人」という公的社会的アイデンティティ： 帰国子女の「日本人」意識を考えるために<sup>1)</sup>

南 保 輔

## 1. はじめに

本論文の目的は、海外・帰国子女の「アイデンティティ」を取り扱っていくための理論的・概念的な道具立てを用意することである。著者は、海外・帰国子女について行った調査結果をもとに現在モノグラフをまとめる作業を行っているが、そのための準備作業と位置づけられる。

行動・社会科学の領域で「アイデンティティ」という言葉が広く使われるようになったのは、エリクソン Erik H. Erikson 以降のことであるが、現在ではその意味するところは多様である。「アイデンティティ」を取り上げる研究で、このような苦情を表明しないものはほとんどない(例えば、Gleason 1983)。この点をなんとか打開しようとシンポジウムを開催して、その結果を論文集にまとめるグループもあるほどである(Breakwell ed. 1992)。「アイデンティティ」は魅力にあふれ、研究を統合する可能性に満ちている。そのために多種多様な研究において使用され、統一した定義を与えるのがほとんど不可能なほどである。従来のアイデンティティ研究すべてを概観したり、整理したりすることは本論のなしうることではない。著者は、帰国子女のアイデンティティについて研究してきたが、このための分析道具として相互作用状況と結びついたアイデンティティという概念を用意することを目指している。本論では、著者の定義・用法を明らかにすることに照準して議論することにした。

本論では、アイデンティティを、ある基準(社会的カテゴリー、あるいは「本当の自己」)に照らして、自己の在りようを語り、評価する方法、プロセスであると定義する。このような定義を行う理由が以下で論じられるが、このアイデンティティ定義の特徴として2点指摘しておきたい。まず第1点は、アイデンティティの実体視を回避する点である。あ

る人の固有の属性として「アイデンティティ」を捉える立場が普通のものであるが、本論ではそのような立場を取らない。これは、第2の特徴と深く結びついている。

第2に、アイデンティティは、人が反省的に考察するときに可視化されるものであり、調査者にとって観察可能となるのは、当事者との語りという談話データの中であると考えられる。これは、方法論、ひいては認識論とも関係してくる。社会科学者としての著者が、アイデンティティを取り扱う際のデータとしては、アイデンティティが問題となっている本人、あるいはその周囲の人間の報告（談話）に頼らざるをえない。TATのような心理テストであれ、セラピーにおける質問であれ、調査用紙への回答であれ、調査者からのなんらかの働きかけなしに、「アイデンティティ」に関するデータを集めることはできない。つまり、「アイデンティティ」に関するデータは、なんらかの意味で調査者と本人との相互作用によって生み出されているのである<sup>2)</sup>。TATや深層面接のような技法では、「無意識」レベルのデータが得られると主張するのかもしれないが、著者の集めたデータは、日常的な会話レベルのインタビューによっている。つまり、当事者の意識、反省的な思考を反映したものである。

このような方法上の自覚に立てば、著者にはアイデンティティを実体視することはできないことになる。人びとが、「アイデンティティ」についてどのように語るのか、これがテーマとなるのである。「アイデンティティ」について語る際に、どのような表現・文化モデルを動員し利用するのか。あるいは、どのように語ることで、「アイデンティティ」を主張、確立しようとするのか<sup>3)</sup>。本論で提示される枠組みを使用して行われる分析における根本的な問いはこのようなものとなる。

## 2. アイデンティティの4類型：ゴフマンを手がかりに

アイデンティティを実体視しないからといって、その内実についての議論が不要というわけではない。とりわけ、アイデンティティが「語り口」だとするならば、それが何についてのものか、どんな関係についての「語り口」なのかを明確にしておくことが必要である。「あなたのアイデンティティはなんですか」というように、「アイデンティティ」という言葉をインタビューにおいて使うことはほとんどないのであるか

ら、「内実」についての議論は特に重要である。

「アイデンティティ」を広めることになったのは、精神分析家のエリクソンであるが、社会学者として相互作用場面に適用したのは、ゴフマン Erving Goffman である。『スティグマ：スポイルされたアイデンティティの管理についての覚え書き *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*』の中で、ゴフマンは、「社会的アイデンティティ social identity」, 「個人的アイデンティティ personal identity」, 「自我アイデンティティ ego identity」の3つのアイデンティティを区別している。「社会的アイデンティティ」は、ある人を他者がある社会的カテゴリーの一員と同定すること identification をさす。「見知らぬ人に会った時に、外見によってわたしたちはその人の所属するカテゴリーやその人が持つであろう特性を予期することができる」(Goffman 1974: 2)<sup>4)</sup>。このカテゴリー化が、一連の特徴をその人が持っていると考えるように仕向けることになるとゴフマンはいう<sup>5)</sup>。つまり、「社会的アイデンティティ」は、ある人と「所属する」社会的カテゴリーを結びつけることなのである。

「社会的アイデンティティ」が社会的カテゴリーの同定を問題とするのに対して、「個人的アイデンティティ」は、唯一無二の unique 個人の同定を問題とする。「個人的アイデンティティ」は、「肯定的マークやアイデンティティ・ペグと、これらのペグの助けを借りて本人に付加されるライフヒストリー項目との唯一無二の結合」(Goffman 1974: 57) とからなっている。普通アイデンティティ・ペグとして使われるのが、名前である。「個人的アイデンティティ」が問題となるのは、「長く関係が続く小さな社会集団で、各成員がお互いに『唯一無二の人間』として知られるようになる」(Goffman 1974: 56) 状況であり、これは、相互作用に関与する人間が、「相互作用が始まる前から互いを『個人的』に知っている」(Goffman 1974: 51) ときである。

3つめの「自我アイデンティティ」は、「多様な社会経験の結果として個人が持つようになる、自分の状況や自分の連続性や性格についての主観的感覚」(Goffman 1974: 105) である。「自我アイデンティティ」をゴフマンは「感じられた felt」アイデンティティとも呼ぶ。この点で、エリクソンが「自我アイデンティティ」は「元気づけるような invigorating 同一性と連続性についての主観的感覚」(Erikson 1968: 19) にある

といっているのと通じるところが大きい。

ゴフマンは、「自我アイデンティティ」は、「社会的アイデンティティ」や「個人的アイデンティティ」とは異なると考える。「社会的アイデンティティと個人的アイデンティティは、アイデンティティが問題となっている個人についての、他者の関心や定義づけの一部である」(Goffman 1974 : 105-6)。つまり、ゴフマンは、同定する主体によってアイデンティティが区別されると主張するのである。当人が同定の主体である「自我アイデンティティ」と、当人以外の他者が主体である「社会的アイデンティティ」と「個人的アイデンティティ」とを区別するのである。本論では、同定主体の区別という軸に対応して、当人によるものを私的 private アイデンティティ、他者によるものを公的 public アイデンティティと呼ぶことにする<sup>6)</sup>。

海外・帰国子女のアイデンティティを考える上でもう1つ重要な軸は、同定する対象である。ゴフマンは、ある人を社会的カテゴリーと結びつけたものを「社会的アイデンティティ」と呼んだ。エリクソンの「自我アイデンティティ」は、自己の同一性や連続性を問題にするものだが、これは、現在の自己を昨日までの自己に結びつけることである。つまり、ある人を唯一無二の自己と同定する作業と考えられる。同定の対象として、社会的カテゴリーと唯一無二の自己とを分類して、前者を社会的アイデンティティ、後者を個人的アイデンティティと呼ぶことにする。

先の私的・公的の軸を縦軸として、個人的・社会的という横軸と交差させることで、4種類のアイデンティティが区別できる(図1参照)。まず、私的個人的アイデンティティがある。これは、エリクソンのいう自我アイデンティティにあたる。自己の同一性や連続性を当人が判断するものである。次に、私的社会的アイデンティティがある。「私は、日本人だ」とか「私は、学生だ」などの命題で端的に表現される。そして、これらを他者が判断する場合がある。公的個人的アイデンティティは、「あの人は、山田さんだ」という表面的同定から、「今日の田中さんは、別人みたいだ」というパーソナルヒストリーに深く関与するレベルまである。最後が、公的社会的アイデンティティであるが、「あの人は、帰国子女だ」とか「あの人は、弁護士だ」などの表現の形をとることが多い。

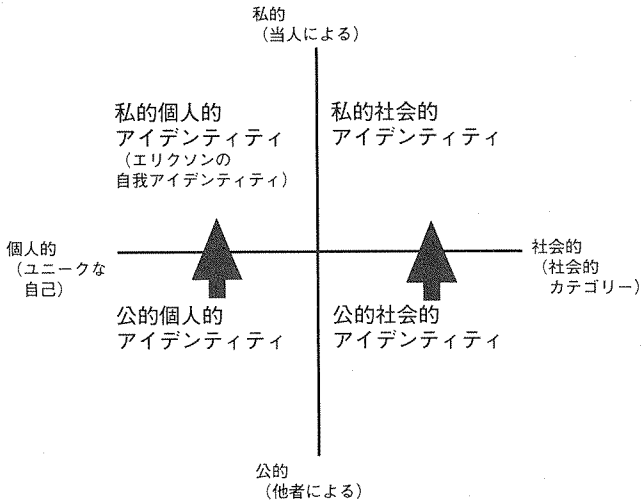


図1. アイデンティティの4類型

(註: 矢印は役割取得を表す)

これら4種類のアイデンティティ間については、いろいろなものが考えられるが、ここで指摘しておきたいのは、公的アイデンティティと私的アイデンティティの関係である。当人による同定が、周囲の他者、とりわけ意味ある他者 significant others の同定によって影響されるという関係が重要である。この関係は、社会学で「役割取得」と呼ばれてきたプロセスの一部と考えられ、図1の上向きの矢印で表される。逆に、当人の同定に基づく行動が他者の印象を操作するという形で、私的アイデンティティが公的アイデンティティに影響するという事も考えられるであろう。この点については、社会心理学で多大な研究がある(例えば、Liebkind 1992)。ゴフマンのステイグマ研究 (Goffman 1974) は、逆に、公的アイデンティティをいかに操作するかについての分析だと考えられる。

エリクソンの「個人的 personal アイデンティティ」は、私的アイデンティティと公的アイデンティティの絡み合いを取り込んだものとして定義されている。「個人的アイデンティティ」は、「時空間内での自己の同一性と自己存在の連続性の知覚と、自己の同一性と連続性を他者が是認 recognize していることの知覚」(Erikson 1968 : 50) とからなってい

る。この定義に見られる第2の要素、つまり、他者によって是認されていることの知覚が、当人の同定が安定したものになるために必要であるというのである。著者の言葉でいえば、社会が提供する社会的カテゴリーというモデルに従って私的アイデンティティを形成するというだけでは不十分で、私的アイデンティティは他者によって是認され再確認される必要がある。私的アイデンティティは、公的アイデンティティと合致し、公的アイデンティティから支持を受けることが必要なのである。

最後に、著者の「アイデンティティ」と「同定」という2つのカギ概念の関係について述べておくと、同定プロセスの産物としてアイデンティティを考えている。たとえば、人自身やその行動が名前と同定されると、公的個人的アイデンティティが確立される。「同定」は想定されている認知過程をさし、「アイデンティティ」は同定プロセスによって達成される状態をさしている<sup>7)</sup>。

### 3. 成員性としての社会的アイデンティティ

著者が公的社会的アイデンティティをとりわけ問題とするのには、2つの理由がある。1つには、これが、自己と社会的カテゴリーとを他者が同定し結びつけるプロセスの産物であるからである。人とカテゴリーという2つの客体が問題となるという点で、同一性が問題となり、結局は自己という1つの客体を取り扱う個人的アイデンティティとは異なる。「アイデンティティ」の「同一であること」という元来の意味に、より忠実なのが個人的アイデンティティであるとするなら、社会的アイデンティティは拡張された意味を持っている。

2つ目には、社会的カテゴリーという要素を取り込むことで、社会的次元を取り込んで、個人の社会性を考察する契機を提供することである。社会的アイデンティティに使用される社会的カテゴリーは多様である。たとえば、国民、社会、文化、民族（人種）、地域から学校や企業などの所属組織までの地理的空間を共有する人間集団群と、性、役割、職業、年齢集団、階級（社会経済的地位）などの地理的空間の共有がない集団群がある。これらの人口統計学的な変数がアイデンティティを論じる際によく引き合いに出されるが、「正直者」のように属性規定的に想定される社会的カテゴリーもある。ビディックとベンスマンが調べたスプリングデール Springdale の人々が、自分たちを都市の住民と対比し

て「ただの普通の人 just plain folks」としていたのは、その好例であろう (Vidich & Bensman 1968)。

社会的カテゴリー、あるいは、社会的アイデンティティというものの社会科学における理論的・方法論的意義というものの1つには、同一の社会的カテゴリーに属する人びとの生活経験の共通性に言及できるという側面がある。たとえば、「女性」が月経や出産を経験し、ユダヤ人の祖先が「放浪」を経験したというようなことである。認知の道具としては、社会的カテゴリーが、他者からの見られ方や対処のされ方を規定する側面がある。逆に、他者を社会的カテゴリーに照らしてその特性を推測帰属することもある。このように考えると、実体的な集団を想定するか否かでカテゴリーを区別することにどれだけ意味があるかは疑問である。しかし、類似の歴史と生活経験を共有するという実体的集団を想定する「民族」などが、社会的アイデンティティとしてよく使用されるカテゴリーの典型例であることは間違いない。

次に、相互作用、とりわけ対面相互作用において、公的社会的アイデンティティが確立されるメカニズムについて考えてみよう。ある社会的カテゴリーと同定されるためには、そのカテゴリーを表出するものと広く信じられている特性を示す必要がある。「正直さ」を感じさせるようにふるまうことで、「正直者」と呼ばれることになる。「正直者」のように属性規定的に想定される社会的カテゴリーは、同定に必要とされる条件が比較的明快である。しかし、実体的な人びとの集団の存在を想定する社会的カテゴリーの場合は複雑である。たとえば、「日本人」と同定されるときに使用される行動特性は、どんなものだろうか。あるいは、「帰国子女」という社会的アイデンティティが付与されるのは、どんな言動に触発されてのことなのだろうか。著者が関心があるのは、このような問題である。この問題を取り扱っていくのに参考となるのが、集団文化と個人の行動の関係で文化を捉える、グッデナフの文化定義である。グッデナフは、「当該文化の成員によって容認されるような仕方で行動するために、人が知っているべきことや信じているべきことが、文化である」(Goodenough 1957: 167) という。

この定義で注目すべきは、ある文化の成員たちによって、その文化の一員としてふさわしいと認められるような行動の仕方があるということである。これを、グッデナフは「機能的成員 functional member」と呼

んでいる。彼の文化は、機能的成員が持っているべき知識として定義される。著者はグッテナフに従って、機能的成員と認定されることが、社会的アイデンティティの確立の基底にあると考える。つまり、社会的アイデンティティは、機能的成員性であると主張するのである。そして、機能的成員であるために必要な知識を文化的知識として、これを探っていく。

#### 4. 文化的知識とコミュニケーション能力

「当該文化の成員によって容認されるような仕方で行動する」こと、つまり、場面においてふさわしい行動ができるということが、機能的成員性である。場面において期待される行動というのが集団ごとに、文化ごとに決まっており、成員に共有されている。これに照らして、ある人の行動が適当であるかどうか、つまり、機能的成員であるかどうかが判断される。この判断は、行為者本人も行うが、周囲の他者も行う。本人によるものが、私的社会的アイデンティティ、他者によるものが、公的社会的アイデンティティであり、後者が前者に影響するということは、すでに指摘した。

グッテナフにしたがって、文化を、成員が所有している知識と考えるならば、スパイロ (Spiro 1951) が論じた、文化とパーソナリティの一元論が関係してくる。文化もパーソナリティも、その内実が学習された行動であるならば、実質的に同じものであるとスパイロは主張する。これは、ロング (Wrong 1961) がその危険性を指摘した、過度に社会化されたものとして人間を考える立場を思わせる。社会規範や行動期待にこたえるものとしてのみ人間を捉えるならば、その主体性の余地がなくなるというのである。ダンドラーデ (D'Andrade 1990) は、スパイロが行動次元にのみ着目していて、動機付けや認知の側面を見落としていると批判している。

著者は、パーソナリティというものの存在を前提にしない。著者の立場は、もし「パーソナリティ」と呼ぶべきものがあるとしたら、それはどのようなものであるかを明らかにしたい、というものである。これは、本論の主題であるアイデンティティについても同じである。「アイデンティティ」があると人びとが考えているとすれば、それはどのような条件によって可能となっているのか、これを解明することが大切な



である。

他者によって機能的成員であると認定されるために必要な条件を考えると、その文化の成員の大多数によって共有されている知識を持っていることが挙げられる。食事の前に「いただきます」と言う、車を運転している時は道路の左側を走る、などさまざまな文化的知識に頼って人は生活している。スプラッドレー (Spradley 1972) のいうように、「人間の行動は、文化的情報体系の使用により、構築され、協調され、解釈される」のである。

グッデナフは文化を定義するために「機能的成員性」を持ち出したのだが、この概念をコミュニケーションのレベルで定式化したのがハイムズ Dell Hymes のコミュニケーション能力 communicative competence の概念である。これは、「ある社会にただ単に話すことができる成員としてではなく、コミュニケーションができる成員として参加する能力」(Hymes 1974=1979: 107) である。ハイムズのコミュニケーション能力は、チョムスキー Noam Chomsky の唱える言語能力 competence のみでは人々の実際の言語使用は理解できないと指摘し、文法知識の他に話し手が利用する**暗黙の知識や能力**を含むものである。言語学に人類学の知見を持ち込もうとするハイムズの立場を象徴的に示している。

ハイムズの提唱を押し進めて、実際の相互作用場面におけるコミュニケーションに適用したのがガンパーツ John J. Gumperz である。彼によれば、コミュニケーション能力は、「会話における協力を創出し維持するために話し手が持っていなければならない、言語や関連するコミュニケーション上の慣例についての知識」(Gumperz 1982: 209) である。そして、この知識が「長めの言語的出会いに効果的に参加するための事前条件」となるのである。

著者は、「効果的な参加」とそれを可能とするコミュニケーション能力とに興味がある。とりわけ、これらとアイデンティティとの関係である。「効果的な参加」は参加者本人にとっては、「違和感のない状態」であると思われる。「効果的に参加」していない状態では、なんらかのしっくりこない感じ、つまり不快に感じる feel uncomfortable ののではないだろうか。つまり、社会的アイデンティティの基盤に、快適な感覚 feel comfortable, 「効果的な参加」感、「機能的成員性」があり、それを可能にするのが、コミュニケーション能力であり、言語能力と文化的知識

なのである<sup>8)</sup>。

## 5. おわりに

本論では、媒介概念としてアイデンティティを考えるための準備作業を行った。「わたしは日本人だ」と感じるときにどんなことが起こっているのか、それを考えていくために必要と思われる論点を整理した。まず、社会的カテゴリーと同定主体について考える必要があり、同定の要件として、相互作用場面における機能的成員性、その要因として言語と文化的知識を考察する必要があると指摘した。帰国子女の社会的アイデンティティの分析にこれらを適用していくことが、著者の次なる課題である。

### 註

- 1) 本論文は、著者の Ph. D. 論文 (Minami 1993) の第 3 章 “Identity” の一部を加筆・修正したものである。Ph. D. 研究を指導されたシクレル Aaron V. Cicourel 教授の助言と励ましに感謝する。
- 2) 相互作用場面を直接あるいは録音・録画して観察する方法がある。西阪 (1997) がその相互行為分析で「異文化性の相互行為的達成」を明らかにしているのはその例である。著者も西阪の問題意識は共有しているつもりだが、現在準備中のもの (南 ip) では少し異なる方向を目指している。ともあれ、本論が想定するのは、自然な natural 相互作用場面から離れた状況で得られた「アイデンティティ」に関するデータである。

リンディーは、ライフストーリーについて著者と同様の立場を取っている。「内的ライフストーリーは、内省によってのみアクセスできるもの」であり、語りという営みを通じてデータとなる。語られたライフストーリーが、内的ライフストーリーを忠実に反映したのとは考えられないのである。

ライフストーリーは、社会的相互作用に決定的に関与している言語学的単位であるが、われわれの内面の主観的感覚とも関係している。これは、われわれの過去の人生、現在の状況、そして想像される未来についてのわれわれの理解を組織する、私的ライフストーリーを所有しているという感覚である。この内的ライフストーリーは、内省によってのみアクセスできるものである。それを語ろうとするどんな試みも、ある聴衆に向かって語るという白日の世界へとライフストーリーをただちに引き

出すことになる。実際、内的ストーリーを持っていると意識しているかどうか、もし意識しているならそれはどんなものか、と人びとにたずねてみると、さまざまな回答が返ってくる。語り、しかも3人称の語りとして経験すると報告する人がいる。映画のように展開するものと見る人もいる。外の社会的ライフストーリーとパラレルなあるいは象徴的に関係している、何年にもわたる枝分かれした詳細を伴った空想的ライフストーリーが進行しているものを語ってくれる人もいる。これは、ウォルター・ミティ現象と呼べるかもしれない。これらの内的ストーリーを研究することは極端にむずかしいことではあろうが、人前で語られるライフストーリーがどのようにして一貫したものとされていくかを研究することで、われわれが私的な意味の世界をどのようにして作り出すのかの一端を明らかにすることができるだろう。

(Linde 1993: 11-12)

- 3) 語り narrative 概念の魅力は、語られる内容や経験と、実際に生じて体験された内容や経験とが一致しないことを許容するところにあると、コイル (Coyle 1992: 193) はいう。アイデンティティを語りと捉えることは、アイデンティティを実体視する危険から遠ざけてくれる。
- 4) 邦訳は著者による。
- 5) 「各カテゴリーごとに、成員にとって普通で自然であると感じられるような、人をカテゴリー化する時の方法やカテゴリーを補完する特性を、社会は確立している」(Goffman 1974: 2)。
- 6) 主観的 subjective と客観的 objective という用語も考えられる。また、Gleason (1983) が、エリクソンのアイデンティティが内面性 interiority を重視し、シンボリック相互作用論などの社会学者はアイデンティティを外部から賦与 ascribe されると指摘しているのに従って、内的 internal と外的 external という用語も考えられよう。
- 7) こういうからといって、著者は、一つ一つのアイデンティティのすべてが実際の認知操作の結果として確立されると主張しているわけではない。
- 8) 言語とアイデンティティの関係も著者の主要関心であるが、本論では触れる余裕がなかった。リープキンドは、「個人的アイデンティティに集散的民族的アイデンティティを編み込む interweave のが言語である」(Liebkind 1992: 150) という。そして、言語とアイデンティティとの関係について、ランゲとウェスティン (Lange & Westin 1985) を引用して、5つの条件を

挙げている。(1)存在論的には、自己や世界を名付ける道具として、言語は個人にとって意義深いものである。(2)一次社会化は、基本的には言語を通じてなされる相互作用である。(3)文化の認知的で連結的な部品としての社会的表象は、言語で表現される。(4)共通の出自についての神話の媒体となるのは、言語である。(5)民族の標識となるものの中で、話し言葉はもっとも顕著なものの一つである。

しかし、リーブキンドは、言語、とりわけ母語とアイデンティティとの関係は、大変複雑で解明されていないことも多いという。たとえば、言語を流暢に話すことと言語的アイデンティティとは混同されるべきではないという(Liebkind 1992: 151)。この指摘は、機能的成員性を重視し「言語を流暢に話すこと」をアイデンティティの基底に見ようとする著者の立場への批判となっている。これは、対面相互作用場面にアイデンティティを位置づけようとする試みが取り組むべき挑戦である。

#### 引用文献

- Breakwell, G. M. ed. 1992. *Social psychology of identity and the self concept*. London: Surrey University Press.
- Coyle, A. 1992. 'My own special creation'? The construction of gay identity. In Breakwell ed. 187-220.
- D'Andrade, R. G. 1990. Culture and personality: A false dichotomy. In *Personality and the cultural construction of society: Papers in honor of Melford E. Spiro*, ed. D. K. Jordan & M. J. Swartz, 145-60. Tuscaloosa: University of Alabama Press.
- Erikson, E. H. 1968. *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
- Gleason, P. 1983. Identifying identity: A semantic history. *Journal of American History* 69: 910-31.
- Goffman, E. 1974. *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. New York: Jason Aronson.
- Goodenough, W. H. 1957. Cultural anthropology and linguistics. In *Report of the seventh annual round table meeting in linguistics and language study*, ed. P. Garvin, 167-73. Washington, DC: Georgetown University.
- Gumperz, J. J. 1982. *Discourse strategies*. Cambridge University Press.
- Hymes, D. 1974. *Foundations in sociolinguistics: An ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. = 1979. 『ことばの民族誌

- ：社会言語学の基礎』(唐須教光訳) 紀伊国屋書店。
- Lange, A. & C. Westin. 1985. *The generative mode of explanation in social psychological theories of race and ethnic relations*. Research Group on Ethnic Relations, Social Cognition and Cross-Cultural Psychology, Dept. of Education and Center for Research in International Migration and Ethnicity, Report No. 6, University of Stockholm.
- Liebkind, K. 1992. Ethnic identity — challenging the boundaries of social psychology. In Breakwell ed. 147-85.
- Linde, C. 1993. *Life stories: The creation of coherence*. Oxford University Press.
- Minami, Y. 1993. Growing up in two cultures: The educational experiences of Japanese students in America and their return to Japan. Ph. D. diss., University of California, San Diego.
- 南保輔 in preparation. 『日本人アイデンティティの再生産と浸食：帰国子女の海外・帰国経験の研究』
- 西阪仰 1997. 『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』金子書房。
- Spiro, M. E. 1951. Culture and personality: The natural history of a false dichotomy. *Psychiatry* 14 : 19-46.
- Spradley, J. P. 1972. Foundations of cultural knowledge. In *Culture and cognition: Rules, maps, and plans*, ed. Spradley, 3-38. San Francisco: Chandler.
- Vidich, A. J. & J. Bensman. 1968. *Small town in mass society: Class, power and religion in a rural community*. rev. ed. Princeton: Princeton University Press.
- Wrong, D. H. 1961. The oversocialized conception of man in modern sociology. *American Sociological Review* 26 : 183-93.